

同じ穴のむじな

会員 伊佐隆好

田久保先生の「宜野湾新市長の良心を問う」に一言。

「中国は親戚」発言について。中国人を先祖に持つ県民が一部いることは事実である。だからといって、県民の大多数がその影響を受けているとは思えない。県民はどう逆立ちしても、中国人を親戚とは思っていない。

長い歴史の中で、中国の影響を受けなかったアジア諸国はなかったであろう。日本の仏教の歴史を見ても分かるように、聖徳太子の時代から大陸の影響があり、当然、沖縄も例外ではなく、「自立」出来ない世界環境の中で、独自の生活手段を巧みに利用してきた。それが世界の趨勢であった。問題は、近代に入り明治、大正、昭和と他国の干渉が入り乱れ、戦後 67 年間、日本列島の中にありながら、北方領土と同じく沖縄も他国に「占領」されたまま放置され、経済中心の国策が推進され、気が付いたら手足をもぎ取られ、国防や領土に無頓着な「国民」になっていた。

沖縄返還当時、米軍基地の半分にでも自前の自衛隊が配備されていれば、普天間問題も「国内」問題として容易に解決できたのではないか。返還時に受け入れ体制が不十分なままだった自治体、復帰運動の目標を失った教職員・自治労・全軍労（基地労働者組織）、その隙を巧みに利用した日教組の教育を受けた県民、「反日教育」「日の丸反対教育」をやりたい放題の政治家・言論界・マスコミなど、伊波、佐喜真両氏ともども同じ穴のむじなである。